

今年の夏はひときわ暑く、外に出ると吐き気がして倒れそうになるので、一日中マンションの中に籠っていた。テレビもラジオもインターネットも、コマーシャルが煩わしい。すべてを消去してしまうと、今度はセミの声がうるさく感じられた。私は激務から解放されて安らぎを求めていたので、耳栓を付けて布団の中で過ごす毎日だった。

その夏も終わろうとしていた。早朝に草地から流れてくる風が心地よい。アキアカネが飛び回っているが、鳴かないので気にならない。夏の間見なかったモズが電線にとまって、ギイギイと鳴いていた。こちらはうるさい。夏休みが終わると、大学の講義が再開する。

私が住む築二十年のマンションは、三階建てで鉄筋立てであったが、ところどころで錆が目立ち、外壁は元々クリーム色であったものが黒く煤けていた。それでも構造はしっかりしており、壁も厚く、隣人の声が聴こえることはほとんどなかった。地震がきても、ほとんど揺れなかった。マンションの家賃は2LDKで七万円と安いので、入居者が絶えることはなかったが、その多くは老人で、子供のいる家族は少なかった。

マンションの北側には鉄工所があり、ときどき鉄を打つ音が聴こえた。南側は住人の駐車場になっていた。夕方になると駐車場に豆腐屋がやってきて、美味しい豆腐を買わないかと訴えてくるが、私は買ったことがない。

東側は公園になっていて、その立木のためにセミが多かった。西側は空き地になっており、ところどころで雑草が生い茂っていた。雑草の背丈は一メートルほどになっており、さまざまな動物が棲んでいた。雑草の間でタヌキやウサギを見たことがある。アオダイショウもいる。鳥類としては、カワラヒワとホオジロが多く、冬にはジョウビタキが来たこともある。

スズメ、ヒヨドリ、ムクドリ、ハクセキレイはマンションの敷地を飛び回っている。

マンションと空き地の間には幅が一メートルほどの用水路が流れており、アメリカザリガニが目についた。水量が多い時期には、オイカワやモツゴが泳いでいることもあるが、夏が終わって水田への水の供給は止められていた。わずかに流入する家庭排水で汚れた水路の底には、シマイシビルが這っていた。それでも、台風や雷雨、梅雨のときに集中豪雨が起きると、この水路が溢れることがあり、それがマンションの住人にとって最大の危険因子だった。

都会のマンションに比べると、はるかに自然に富んでいるのだが、それだけに蚊やブヨな

どの虫が湧いてくることが多い。雑草を刈るべきだとか、水路を暗渠にするべきだとか、マンション管理組合の総会で意見が出たことがあった。しかし、他人の土地で生じる草や虫についてとやかく言う権利はない。

マンションは建てられたときに分譲され、建設会社はその時点で利益を確保した。それぞれの部屋を買い取ったオーナーの中には実際に住み着いたものもいたが、大部分は投資用に賃貸に出された。毎年入居者がいれば、三十年ほど経つと、その後の賃貸収入は利益になるらしい。

私はマンションが売り出されたときに、ローンで購入し、妻とともに住み始めた。やがて長男が生まれ、三人で幸せに暮らすはずであったが、長男が小学校に入った頃に、妻との関係が悪化した。

妻は活発な女性で、時間があれば外出してハイキングやジョギングをすることを好んだ。貯蓄をすることを好まず、将来のことを心配するよりは、現在の活動を楽しむためにお金を注ぎ込むべきだと考えていた。一方、私はインドアが好きで、休みの日には一日中部屋で寝ていたかった。将来のことを考えて、できるだけ貯蓄を増やし、ローンは避けたかった。食費は切り詰めて、質素な生活を送りたかった。

当初は二人で出かけることが多かった。妻はとりわけキャンプに行つてバーベキューをしながら、友人とワイワイ騒ぐのが楽しみだった。私はそのたびに買い出しから後片付けまで休みなく働かされた。肉や野菜を焼くのも私の役目だった。バーベキューで食べる肉は格別美味しい、と妻は言つたけれども、そのちがいは私にはわからなかった。

妻は専業主婦で、昼間は暇なので、よく友人とランチに出かけていたが、高級レストランで高い料理を楽しんでいたようだった。おそらく彼女は、結婚前に働いて稼いだ金をどこかに隠していたのだろう。ほかの友人と張り合うために、ブランド品を買つてくることもあった。

自分とは性格の異なる女性と結婚すれば楽しくなるかもしれない、と思つたが、実際には逆だった。妻の外出と浪費は子供ができて変わらなかつた。そのために私の家庭における仕事とストレスは増大した。一方、妻の方も私への不満が大きくなり、亀裂は回復できないほど広がつた。そして、とうとう妻は子供を連れて出ていった。

あとから妻の友人から、妻が私についてどう思っているのか聞かされた。それによると、私は覇気がなくて自分の殻にこもり、何をするのも消極的で挑戦心に乏しい、つまらない男らしい。何か危険なことが起こつたら、妻や子供を放つて自分だけ逃げる卑怯な人間だとも

言ったそうだ。

しばらく別居したのち、離婚調停が成立した。一人息子の養育費として、月に十万円支払うこと、マンションの残りのローンは私が返すことが定められた。私には不利な条件だと思っただ、私には息子を育てる自信がなく、妻の言いなりになるしかなかった。

マンションは一人暮らしにとっては心地よい。上下左右に人が住んでいると思うと、荒野の一軒家に一人で住んでいる場合に比べて、寂しさを感じなくてよい。真冬には、隣室に人がいるのといないのでは、暖かさがちがう。マンションのまわりをうろうろしていると、誰かに出会って話をすることができる。マンションの方々に監視カメラが設置されているので、防犯上も安全である。

一方、一軒家だったら、帰宅と同時に誰かが隠れていないかしらべなければならぬ。夜には強盗が襲ってこないか心配になる。それでも、窓や入り口がいくつもあるのです、どこから侵入されたら、防ぎようがない。寝ているときに火事が起きても、誰も起こしてくれないだろう。

マンションには管理組合が設けられていた。その仕事は、清掃のほか、管理費や積立金の徴収、傷んだ外壁や下水管の補修など、さまざまであるが、そのほとんどは委託した管理会社が代行してくれた。私は大学の先生ということで、そのマンション管理組合の理事になっていた。

大学からマンションに戻ると、私は敵がない隠れ家に戻った魚のように、安らかな気持ちになることができた。一方、マンションの外では、どんな敵やスパイが私のことを見張っているのか、わからなかった。スパイの雇用主は元嫁、教授、大学院生など、いくらでも考えることができた。

ある日、スーパーで買い物をして帰ったとき、部屋のドアを開けようと、持っていたエコバッグを一旦床に置いた。そのとき小さな黒い影が走ったのだが、それほど気にならなかった。部屋の中にはいろいろな虫がいる。ハエやカは迷惑なので薬を撒いて始末する。小さなゲジゲジは紙でつまんで捨てる。そのほかにクモや小さな甲虫のような虫が床を這っていることもあるが、たいていは放っておく。どんな部屋でもダニやシラミはたくさん棲んでいる。そういうやつらを、大きな虫は食ってくれるのではないか、と根拠なく考えていた。私は魚の研究者なので、虫にはくわしくない。

トイレでは、便器の上方にある貯水タンクから、レバーによって水が流れ出て、汚物を洗

い流す仕組みになっていた。貯水タンクの上には、給水口があり、そのあたりは平らで湿っており、私はそこに掃除用の金タワシを置いていた。その日の晩、玄関に近いトイレで用を足したのち水を出すと、一匹のコオロギが給水口の金タワシの下から飛び出し、私を置いてトイレの外に出て行った。

コオロギが家に棲みついたことを実感したのは、その一時間後だった。そいつはトイレの横にある洗面所の奥、いくつかの段ボール箱や雑貨、スキー板、クーラーなどが積まれたところで鳴き始めた。鳴き始めると、休むことなく鳴き続けた。

私は居間に移動し、その入り口のドアを閉めた。コオロギの歌声は心地よいものだったが、あまり大きいとうるさく感じられる。壁を隔てているものの、隣人には聞こえるかもしれない。コオロギの音を聞かれて苦情を言われたら嫌だなと思った。

しかし、マンシヨンの周りではコオロギが盛んに鳴いていた。コオロギの鳴き声が聞こえたとしても、それが私の部屋の中から発出されたとは思われないかもしれない。

コオロギがマンシヨンのベランダに侵入することも、これまでに何度かあった。ベランダでは食べるものがないだろうから、私は梨や林檎の皮を与えたことがある。ただし、コオロギがそれを食べたかどうかは定かでない。それでも、隣人から苦情を言われることはなかった。

右隣の石井さんは夫に先立たれたそうで、静かに暮らしている。左隣の福田さんは、犬を二尾飼っていて、ふだんはおとなしいのだが、マンシヨンの外をほかの犬が通ると、激しく吠えることがある。それでも、犬はすぐにおとなしくなるから気にならない。マンシヨンでありがちな隣人トラブルは起きたことがなかった。

欧米人はコオロギなどの鳴き声をうるさく感じるそうだが、日本人は好ましい音として愛好している。中国の古い漢詩にも、コオロギをいとしく思う心情が詠われている。私もコオロギが洗面所にいるかぎりは、いくら鳴いても気にならなかった。コオロギが一斉に鳴くのは秋の風物詩である。

朝になって起きると、コオロギがどうしているのか気になったが、音がしないので何もわからなかった。洗面所にあるものをすべてどけて、コオロギを見つけ出すような野暮なことはするまい。

新聞を取るために玄関を開けると、福田さんが犬の散歩に出かけるところだった。「おはようございます」と声をかけると、福田さんは迷惑そうな顔をしている。

コオロギの鳴き声がうるさかったのだろうか。福田さんはマスクを鼻の上までずり上げ

た。そうだ、私は新聞を取るだけだったので、マスクをしていなかった。コロナ流行の中で、マスクもせずに声をかけるのは失礼だった。私は慌てて玄関に置いてあったマスクをして、「すみませんでした」と謝った。

福田さんは「コロナ、早く収まらないかしら、怖くて買い物にも行けないわ」と言った。「そうですね、大学にも行きたくないです」と私が言うと、「そう言えば、あなたは動物学の先生でしたね、コロナって犬も罹るのかしら？」と訊いてきた。

「コウモリからうつったそうですから、犬も罹るかもしれませんね」と言うと、福田さんは私のいい加減な答に嫌気がさしたのであろうか、何も言わずに歩いて行った。

福田さんはコオロギのことを何も言わなかった、大丈夫だ、と思った私は少し安堵した。それにしても私は魚の研究者だ。コロナと犬の関係なんか、わかるはずがない。それでも次に遭ったときにちゃんと答えられるように、インターネットで検索してみると、コロナには犬や猫も罹るらしい。なかには死んでしまった犬も報告されている。しかし、犬や猫から人間にコロナがうつった例はないらしい。

今日は午後にはリモート講義が一つあるだけだった。教授は研究室に出て来いと言うけれども、行ったら迷惑な仕事を押し付けられるだけだろう。私は一日マンションに閉じこもることにした。

先月の初めまで私は論文作成で忙しかった。毎日徹夜で図表を作ったり、関連論文を読んだり、結果について考察したりしていた。自分の論文なら当たり前のことであるが、書いていたのは留学生の論文だった。留学期限が定められた修士の学生が期限までに提出できないので、教授に命令されて私が代わりに作っていたのだ。た。「おまえが書く程度のレベルがちょうどいい」と言われたが、教授の論文作成能力も似たようなものだと思った。

毎日寝ないで作業した結果、私は胃潰瘍になった。「手術をしないと治らないかもしれない」と医者に言われたけれども、何とか論文ができて、その後自宅療養に努めた結果、元気になってきたところだった。教授には体調が悪いので、しばらく登校できないと伝えていた。大学に行かなければ、学生にコロナをうつされる心配もない。

九月の気持ちの良い風が吹いている。私は昼間、窓を開け、部屋と部屋の間のドアを開けて、風が良く通るようにした。リモート講義では、わざと体調が悪いように振る舞い、病気なので声が出ないと言っておいた。心配だったのは、コオロギが鳴いて、その声をリモートで学生に聞かれることだったが、講義の間にコオロギが鳴くことはなかった。

ところが午後四時になってコオロギは鳴き始めた。洗面所のライトを消していたので、コ

オロギは夜になったと思ったのかもしれない。そもそも人家に入り込むようなバカなコロギだから、昼も夜も区別できないのは仕方ない。講義が終わっていてよかったと思った。

講義のあと暇になった。教授には論文を読んで勉強しろ、と言われそうだが、この頃、論文を読む気力がなくなっていた。することがないので、韓流ドラマを見ることにした。『愛の不時着』と『梨泰院クラス』はもう見たので、今回は評判の良い『トッケビ』を見ることにした。千年前の將軍が現代に蘇る話だ。主人公だけでなく、登場人物は何回も生きたり死んだりできるらしい。死神や幽霊がたくさん出てくるのは新鮮だ。

映画やドラマばかり見ていると、自分の論文を書く気力はますます失せていた。論文を書いて投稿すると、さんざんけなされて却下されるか、苦勞して受理されても、高い掲載料を払わなければならない。一ページの掲載料が一万円を超える雑誌もある。研究費の乏しい私の場合、自腹で支払わなければならないので、論文を発表すれば発表するほど損をする。

翌日の午後、久しぶりに買い物に出かけた。食料が尽きたからだ。午後四時すぎに三つのスーパーを回り、賞味期限ぎりぎりのアサリ、カツオ、タラ、エビ、豚肉などを手に入れた。アサリは殻が開いて腐っているように見えても、まだまだ美味しい。カツオは元々冷凍してあったのだから、家でまた冷凍しておけばいい。豚肉は賞味期限が過ぎても二日は大丈夫だ。それでも野菜は新鮮なものを買った。それだけ自宅で長く置いておくことができる。納豆も買った。あまり食べないが、永久に腐らない。

マンションに帰ってテレビを見ていたら、コオロギが鳴き始めた。今日はやけに元気がよいと思ったら、居間の奥、台所の隅に置かれた冷蔵庫の下から音が聴こえる。冷蔵庫の下には、わずかな隙間があった。

居間と台所は続きになっていてドアはない。冷蔵庫の周りは掃除していないので、ゴミの山になっており、とくに冷蔵庫の下は黒くじめじめとしていた。冷蔵庫の中は冷えているが、その分外側は暖かいのかもしれない。どろどろした垢は食用になるのかもしれない。それにしても、いつの間に移動したのだろうか。

コオロギの声は勢いを増していた。少しうるさいと思ったものの、捕まえる術はない。魚ならば、集魚剤を入れたトラップを仕掛ければ捕れることが多いが、コオロギは無理だろう。私はヘッドフォンで音楽を聴いた。好きなのは一九八十年から二千年くらいまでのシティポップス。山下達郎、杉真理、大瀧詠一に伊藤銀二。女性ならば竹内まりあ。中島みゆきも私に合っていたので好きだった。音楽に飽きるとトッケビの続きを見た。それからヘッドフォンを外して寝たが、早朝にコオロギの声で目を覚ました。朝になると、ひととき大きな声

で鳴くことがある。

それにしてもコオロギはなんであんなに激しく鳴くのだろうか。インターネットでしらべてみると、鳴くのはオスだけで、なわばりを主張する場合、メスを呼ぶ場合と、オスどうしが喧嘩して鳴く場合があるらしい。オスが二匹いるわけではないので、喧嘩ではないだろう。なわばり防衛だとすると、私の部屋にいるのは、あのコオロギだけだから、それほどがんばって鳴く必要はない。それとも、テレビやパソコンから出る音をライバルだと勘違いしているのだろうか。

メスを呼んでいるのなら、気の毒な話である。私の部屋でいくら鳴いても、メスはやってこないだろう。いくら鳴いてもメスがやってこないから、コオロギは洗面所から台所に移動したのかもしれない。

いずれにしても、私にはなわばり防衛なのか求愛の歌なのかわからない。また、わかったところで対処の方法は見つからない。

そんなことを考えていたら、ピンポンと音がした。宅配が来る予定はない。

「どちら様ですか」とドアを閉めたまま訊くと、「御手洗望美です」という返事が返ってきた。

背筋がぞっとして、ドアを開けるべきか躊躇したものの、御手洗が教授の指示でやってきたことは明らかだった。開けないわけにはいかない。

「どうしたの？」と目いっぱい笑顔をつくって私が言うと、

「お元気なのか、様子を見てくるように教授に言われたのです」と御手洗は答えた。「遠隔授業では苦しうにされていますが、お体は大丈夫ですか？」

「うん、まあ」と言っ、私はマスクをしていないことに気が付き、慌ててマスクをした。

「毎日コロナのニュースばかりで嫌ですね。大学院に行くのも怖いです」と御手洗は言ったが、この女に怖いものなどあるのだろうか。

御手洗は修士の二年で教授のお気に入りだった。外見はそうでもないのだが、言うことがきつい。私も大学院に入学したころは、いい子が来たと言ったのだが、その後の会話で、この子が普通ではないことに気が付いた。

私がゼミで発表したときには、「先生の結論の根拠が明白ではありません。統計検定の棄却値ほどの程度ですか？」と言われ、返答できなかった。卒業研究生には、「うちの研究室の助教と准教授はあてにならないから無視してもいい」と助言したらしい。

私も助教の徳山もそれほど優れた研究者でなかった。教授が自分より出来が悪く、自分の

脅威になりそうもない私たちを採用したのだから仕方がない。ただし、学会や大学で業績主義が強まるにつれて、私たちへの風当たりは強くなった。よその研究室の教官たちからは、学部平均業績数が下がるので、白い目で見られた。科学研究費を申請しても採択されることはなかった。どこかよその研究室に移ることもできない。挙句の果てに、夜、研究室で宴会をした際に、「おい、そのバカ」と御手洗に言われるありさまだった。酔っていたとしても、許せないと思った。

「せっかく訪問してくれたのだから、お茶でも飲んでいきなさい」と社交辞令で私が言うと、「録音しましたよ」とスマホを振りながら御手洗は答えた。一人暮らしの男性教官の部屋に女子大学院生を連れ込もうとした、ということになるのだろうか。

「冗談ですよ、誰にも言いませんよ」と言って御手洗は笑った。

これで一生、この女には頭が上がらない、何を言っても録音されて、こいつの武器になると思ったら、私は何も言えなくなった。

「早く治して研究室に出てきてくださいね。それから来週の教授の講義五回分、先生に担当してほしいということです。教授の伝言です」そう言って笑いながら、御手洗は帰っていった。

ぐったりと疲れて、私は布団をかぶって寝た。コオロギの音で目を覚ましたら夜になっていた。コオロギには悩みがなくて幸せだな、とうらやましくなった。コオロギはコロナに感染しないし、私の部屋にいるかぎり天敵に襲われる心配もない。なわばりを主張しても、それを侵略しようとするライバルはいない。

コオロギの天敵が何なのか気になって、インターネットでしらべてみた。もっとも強力そうなのは鳥だった。鳥はどこにでもたくさんいる。ヒヨドリやムクドリは、いつも虫を探し回っている。カワラヒワやスズメは大群で襲ってきそうだ。かわいい顔をしたシジュウカラだって脅威だろう。出くわしたら、コオロギは鳥を撃退することはできない。そうだ。だからコオロギは夜行性なんだ。多くの鳥は夜には活動しない。

怖いと言えばヘビやカエルも強そうだ。こいつらは夜でも平気なうえに、藪の中でも突入してくる。飲み込まれたら終わりだ。それからスズメバチ。狩りが上手で大型の昆虫が大好物だ。ほかに、トカゲ、カマキリ、ムカデにクモと次々に恐ろしい天敵が出てきた。私がコオロギだったら生きていけない。

天敵が一種類ならば、それに対して対抗戦略をとることができる。たとえばヘビを避ける

ためには、草の上に留まっていたらいい。しかし、それでは鳥に狙われる。何種もの天敵がいると、そのすべてから逃れることはむずかしくなる。

うちのコオロギは幸せ者だ、と気が付いた私は、リングの皮をむいて冷蔵庫のわきにおいてやった。そうだ、こいつに名前をつけてやろう。いろいろ考えた私は、コオロギから二文字をとってコロと名付けることにした。コロは私が子供のころに飼っていた犬の名前だった。十年飼ったのち、コロは私の家を脱走したが、その一年後に戻ってきた。戻ってきたコロは、その三日後に息を引き取った。

ほかの人間が私のことを好きだと言ったとしても、いつ裏切られるかわからない。彼らにとって、私よりもっと重要なものがあれば、私は簡単に裏切られる。そんな世の中で、コロは立派な犬だった。最後の最後に私を好きだと証明してくれたのだ。

その翌日、コオロギのコロは洗面所に戻っていた。おそらく夜間に私が寝ているうちに移動したのだろう。これはどういうことだろうか。離れた二か所になわばりをつくる分離なわばりだろうか。あるいは、脅威となるライバルがいなことから、私のマンションすべてをなわばりとし、二か所でなわばりを主張するのだろうか。

メスを探していたという見方もできる。冷蔵庫の下で鳴いていたが、いつこうにメスが現れないので、洗面所に鳴き場所を変えたのかもしれない。そうだとしたら、コロは気の毒である。メスを捕まえてコロに与えてみようか。

しかし、動物のペアリングはむずかしい。動物園でオスとメスのライオンを同じ檻に入れてみたら、オスがメスをかみ殺してしまったという話を聞いたことがある。一方で、カマキリのメスは交尾が終わったオスを食べてしまうらしい。メスを与えて幸せかどうかはわからない。私はコロをそのままにしておくことにした。

買物に行こうとしたら、二階の真上の部屋に住む下平さんに出くわした。「こんにちは」と言ったら、「こんにちは」と返してくれた。コオロギのことが気になっているそぶりは見せなかった。

「あー、今度ネコを飼うことにしたの。少しうるさいかもしれないけど、よろしくね」と下平さんは言った。私の部屋でコロが鳴いているのを知っていることだろうか。いづれにしても、私が反対する理由はない。マンション管理組合では、ペットの飼育は容認している。容認しないと、こんなに古いマンションに住む人はいなくなってしまうからだ。

「ネコちゃんはネズミだけでなく、ゴキブリや悪い虫を捕まえてくれるから、マンションにとってもいいでしょう。かわいがってね」と言われたが、コロが捕まったらどうしよう、と

心配になった。

教授から、卒業論文の指導をするように指示された。

「もうすっかり元気になったそうだな。論文指導なんか、論文執筆に比べたら楽な仕事だろう。よろしく頼む」と言われたら、「はい、お任せください」と言うしかなかった。助教の徳山は、うつの症状が出たということで休んでいる。そのために、雑用はすべて私に任せられることになっていた。教授はどこから連れてきた研修員と遊ぶことばかり考えていた。

コロと名付けてから気になっていたのだが、コロは何というコオロギなのだろうか。コオロギと言えばエンマコオロギしか知らなかったが、玄関と便所で見えたコオロギはもっと小さく痩せていた。そこでインターネットで、コロが何と言う種なのか、しらべることにした。幸いなことに、兵庫県立人と自然の博物館の「日本の昆虫―カエルの鳴き声」というサイトがあり、コオロギ各種の特徴と鳴き声をしらべることができた。

まず、エンマコオロギはでかすぎるし、コロコロと鳴くらしいので違う。ミツカドコオロギは頭の形が三角で、鳴き声もツツツと低すぎる。クマコオロギもツツツツツと汚らしい。コロはリイリイリイときれいな声で鳴く。

コロの鳴き声におけるリイの回数を一分ずつ三回数えてみたところ、六十一回、五十五回、六十回だった。そのときの調子で少し変わるようだ。ずっと鳴き続けるわけではなく、ときどき休止する。

残るコオロギのうち、怪しいのはツツレサセコオロギとオカメコオロギだ。ツツレサセコオロギは秋に家屋内に入ることが多いらしい。リーリーリーと鳴くが、コロとはリーとリーの間隔がちがうような気がする。インターネットの声はせわしなく、一分間にリーを八十回繰り返す。

もう一つ怪しいのはオカメコオロギだ。ただし、リリリリと少しリズムが速く、何回か鳴いた後、少し休むようだ。しかし、オカメコオロギには、オオオカメコオロギ、ハラオカメコオロギ、タンボオカメコオロギなど、いくつもの種類がある。地域によって個体差もあるだろう。コロがオカメコオロギではないと決めつけることはできない。

そこで私はコオロギについて解説した本を買うことにした。コオロギの本というと、弘前大学の正木進三先生が書かれた、中公新書の『昆虫の生活史と進化』が知られている。この本には「コオロギはなぜ秋に鳴くか」という副題がつけられており、私の書棚に置かれてあった。しかし、私が読んだのは学生時代であり、何が書かれているのか忘れていた。

あらためて読んでみると、コオロギの生活史について、くわしく知ることができた。コロ

ロギの中には春から夏にかけて成虫になって鳴くものと秋に鳴くものがあるらしい。ツツレサセコオロギには、同じ種でも夏型と秋型がいて、両者は交尾しない。秋に鳴くコオロギは晩秋に交尾して、その卵は越冬して春から夏にかけて幼虫となり、夏の終わり頃に成虫になる。コロと同じである。

もう少し勉強したいと思ってアマゾンでしらべると、松浦一郎先生の『鳴く虫の博物誌』が目にとまった。この本は絶版になっているが、中古本を取り寄せることができた。読んでみると、とてもわかりやすく書かれている。先生は亡くなれているが、名著は残るものだと思った。

この本にオカメコオロギ三種の記述があり、「三種とも姿形がよく似ているので、ちょっと見分けがつかない。鳴声もたがいに似ていて、よほど聞きなれないと区別がつかない」と書いてあった。草原に多いのはハラオカメコオロギらしいが、専門家でもむずかしいのであれば、私に区別がつかはすがない。

そもそも私はコロを二回ちらりと見ただけであるから、正確な種の判定などできるはずがない。面倒になった私はコロをツツレサセコオロギかオカメコオロギの仲間だと決めつけた。それにしても、家屋に入ることが多いコオロギとは、どういうことだろうか。コロは変わり者でもないようだ。

そこでコオロギを詠んだ俳句をしらべてみた。するとインターネットの俳句季語一覧ナビの中に、コオロギを使った俳句がいくつも紹介されていた。コオロギは漢字で蟋蟀と書くらしい。すべてに目を通したわけではないが、家屋に侵入するコオロギについて四句、見つけた。

玄関にて鳴くこほろぎの居候 (高澤良一)

音がして蟋蟀のゐる畳かな (岩田由美)

むなしく帰宅蟋蟀の鳴き迎へ (福田蓼汀)

こほろぎに鳴かれてばかり (種田山頭火)

作者についてしらべると、いずれも著名な俳人だった。やはりコオロギは身近な存在で、昔から家の中によく入ってくるようだ。三番目の句は、私の心情をよく表している。また、どの句もコオロギを迷惑な奴だと嫌っていないようだ。むしろ、コオロギが迎えてくれて喜んでるように感じられる。四番目の種田山頭火の俳句は、屋内か屋外か明示されていない

が、家の中に侵入したコオロギに一日中鳴かれて、あきれているように感じられる。あきれつつ、忌まわしく思っているわけではない。

コオロギが、カヤゴキブリのように日本人に嫌われているなら、家屋で見つかったとたんに殺されてしまうだろう。殺す気になれば、殺虫剤を撒けば簡単に殺すことができる。好かれているからこそ、コオロギは現代でも家の中に入ってくる。コオロギにとって、天敵の多い屋外に比べて、人家の中は安全なのだ。

教授に代わって学部生へのリモート講義を行った。学生の反応がわからないので、手探りで進めなければならない。黒板に書くことができないので、資料は前もって準備しておく必要がある。

学期末には学生による講義の評価が行われる。その中には、極端に厳しい評価を下す学生がいる。声が小さい、何が言いたいのかわかりにくい、雑談が多い、具体例が乏しいなど、敵意に満ちているのである。今年は、コロナによって仕送りやアルバイトがなくなって、苛立っている学生が多いだろう。アメリカでは講義がすべて遠隔になり、大学に踏み入ることもできないために、学費の返還を求める訴訟が相次いでいるらしい。日本でも時間の問題である。だから講義に手を抜くことはできない。

コロナの一日当たりの新規感染者が県内で四百人を超えてきた。学校でもクラスターが発生しているところがある。しばらく大学には行かないでおこう。

しかし、一日中家にいると運動不足になって筋肉量が低下するうえに、頭がきんきんしてくる。便秘になって気も滅入ってくる。私は学生時代から部屋に籠ることが多かったので、一か月くらい、人と話をしなくても平気なのだが、運動不足による体調不良は、いかんともしたい。そこで紅葉も色づいてきたので、外出することにした。

町をぶらぶらしていると、学生に出くわす恐れがある。観光客が集まる名所は感染の危険があるので避けたい。そこで誰もいない山に登ってみた。野鳥がさえずっているが、まだ葉っぱが茂っているために姿は見えず、何の種かわからない。それでも、ぐんぐんと奥へ入っていくと、汗をかくようになり、気持ちがいい。

しかし、森が深くなるにつれて、うす暗くなってきた。そこら中に藪があるので、そこからクマが襲いかかってきたら、防ぎようがない。私は山に登るにつれて、不安になってきた。今年は各地でクマが出没しており、テントを襲ったり、人家に侵入したりしている。小さなクマが攻撃的なこともあり、コグマだからといってバカにはいけならしい。

クマに襲われたらどうしたらよいか、私は十分に勉強していた。とくにクマ研究で知られる米田一彦先生の『熊が人を襲うとき』は参考になる。先生は三千回もの遭遇経験から、いくつかの提案をされている。

離れたところからクマを見つけたら、立ったまま動かないのがいいらしい。走って逃げるのは最悪で、弱い獲物がいると思って襲ってくる。立木があれば、その陰に隠れると、クマには気づかれないようだ。

近い距離で遭遇し、クマがこちらに向かってきたら、ひるまずに立ったまま、手を広げて自分の体を大きく見せて声を出すと、クマが逃げることもあるらしい。怖いのは、首や頭に致命傷を負うことである。いざというときは、うつぶせになって両手で首や頭を守る方法もあり、リュックを背負っていると、背面を守ることができる。多少は攻撃されるかもしれないが、人喰い熊でないかぎり、致命傷は避けられる。

クマがいきなり飛び出してきたときには、闘うしか方法はない。私は念のために木刀とクマスプレーを持ってきた。もちろん、熊鈴も鳴らし続けている。

そんなことを考えていたら怖くなって、山を下りることにした。二十分しか上らなかつたから、往復で四十分だ。これでは運動にならない。仕方がないので、近くの神社に行ってみた。学生に会ったら、コロナの終息と学生の幸福を祈りに来た、と言うことにした。神社をぐるぐる回ったのち、賽銭箱に十円投入しながら、どこか別の研究室に移れますように……と祈ってみた。

マンションに帰ってテレビをつけると、コロが鳴きだした。その声は大きく、また冷蔵庫の下から聴こえてきた。こいつ、行ったり来たりだな。しかも、以前より声の張りが増している。メスに求愛する鳴き声は、甘く誘うような音色らしいから、やはりコロは勝手に一匹でなわばりを主張しているようだ。よそでメスを捕まえて放したら、コロに食い殺されてしまうかもしれない。

その夜、もうコロの鳴き声に睡眠を妨害されることはなかったが、私は嫌な夢を見た。一人で野原にたたずむ私の前に、大きなコオロギが現れた。その後ろにはメスのコオロギ、さらにそのうしろには小さなコオロギが数尾いた。コオロギたちは私に襲いかかってくる。よく見ると、ボスコオロギは教授、メスは御手洗望美、うしろにいたのは学生たちだった。あまりの恐ろしさに私は野原の向こうにある森に逃げ込もうとしたが、そこで待ち構えていたのは巨大なクマだった。私は死んだふりをしたが、そこにコオロギたちとクマがやってきて、背中から私を食べ始めた。話がちがう、話がちがうと、私は泣き叫んだが、コオロギも

クマも許してくれなかった。

うなされて目をさました私は、コロが鳴き止んでいることに気が付いた。テレビはつけっぱなしで寝る私だが、この時には自動的に消えていた。ライバルとしてのテレビが音を出さない、コロも鳴かないのかもしれない。

翌日の午後、散歩に出かけようとすると、原っぱで子供たちが遊んでいた。同じマンションの野原さんが三人の子供と網を振り回して、虫取りをしているようだった。私が「こんにちは」と言ったら近寄ると、虫かごにはバッタとコオロギが数匹入っていた。

「そうだ。あなたは生物の先生でしたね。このコオロギは何という名前ですか？」と野原さんは訊いてきた。

私はそのコオロギがコロと似ていると思ったが、正しい種名を言い当てる自信はなかった。しかし、こういうときに答えないとマンションでの私の評判が落ちてしまう。

そこで「これはツヅレサセコオロギだと思います」と言ってみた。オカメコオロギの可能性もあるが、面倒なのでツヅレサセコオロギだということにした。野原さんは尊敬のまなざしで私を見て、「さすがですね、先生」と言ってくれた。

女の子がまたコオロギを捕まえてきたので、「こんなにたくさん捕ってどうするの？」と訊いてみたら、「食べるの」と言った。

「コオロギなんか食べたら腹を壊しますよ。それに昆虫採集なんて生物多様性を破壊するので、小学校でも禁止されているところが多いんですよ」と言ってみた。

「先生、昆虫食って流行っているんですよ。肉を食うより地球にやさしいので、国連も推奨しています」と野原さんは言い返してきた。

「それでも、このコオロギが食べられるという保証はないですよ」と言ったら、「自動販売機で売ってたもん」と男の子が怒ったような目つきで訴えてきた。

さらに野原さんは「テレビによく出ている生物学の先生が、昆虫採集を愛好しています。ああいう偉大な先生に比べたら、あなたはうじ虫のようなものではないですか」と言ってきた。

私は少しカチンときた。

「かわいい虫を捕まえるのは可哀そうではないですか。偉い先生は研究のために採集しているんです。あなたたちのお遊びとはちがうんです」

「遊びではなくて、食べると言っているではないですか。魚だって、貝や鳥だって、捕まえて食べるではないですか。その行為のどこがまちがっているのですか？」

私は反論できなくなって、「コオロギ食べて死んでも知りませんよ」と思わずきつい言葉を吐いたら、女の子は泣いてしまった。しまったと思ったが、後の祭りである。慌てて自分の部屋に逃げ帰った。

部屋に戻ると、別れた嫁からメールが入っていた。息子が中学に入っているいろいろ出費が多いから、養育費を値上げしろ、という内容だったので、しばらく放っておくことにした。自分を好いていない子のために出費を増やすのは御免だった。

翌日、再び御手洗が訪ねてきた。

「先生、いつになったら研究室に出勤するんですか？ 教授が待ちわびていますよ」

「体調が戻らないんだ。胃潰瘍だったのは知っているよね」と私は録音されていることを念頭に丁寧に応答した。胃潰瘍になったのは教授によるパワハラだ。訴えた方がいいのだが、その場合自分も破滅する。

「もう治っているでしょう。ずる休みはだめですよ」

「基礎疾患があるから、コロナに感染したくないんだ。コロナに感染して重体になったり死んだりしたら、君や教授は責任をとれるのかね」

「大学に出てきても、ソウシャル・ディスタンスを保てば大丈夫です。それにコロナに感染しても、たいていは死にませんよ」

「私は君のように若くもないし強くもないんだ」

「あら、虫が鳴く音がする。虫を飼っているんですか？」

「身も心もボロボロだから虫の音を聴いて安らいでいるんだ。やさしい声で鳴くコオロギなんだ。君とは大違いだ」

「せっかく心配して来たのに、その言い方はひどいと思います。私が女だからバカにしているんですか？」

そう言われて、私は動揺した。

「いや、そんなことはない。君は聡明な女性で尊敬している。悪いのは教授だ」と私が言うと、御手洗は一本取ったというような笑みを見せて、「今の発言は録音しましたよ。ふふふ、教授に言っちゃおうかな。今日は十分成果があったので、これで帰ります」と言って去っていった。

また負けたと思った私は布団にくるまって考えた。早く別の研究室に移りたい。できたら学生がいない方がいい。水産試験場か水産研究所がいいのだが、行政改革によってポストはどんどん削られており、受け入れてくれそうないところはない。地方の私立大学は講義と雑用

が多いらしい。いつそのこと、研究者をやめて楽に食える職業はないだろうか。漁師、養魚場、高校の先生、環境調査会社、塾の講師……。

どう考えてみても、どれも大変だ。怠け者の私には無理だ。それならば、今の地位に留まるしかないが、教授が定年になるまでまだ十年もある。それまで生きているだろうか。そうだ、教授に言ってみて、准教授から助教に降格してもらおうか。給料は減るが、その方が仕事は少なくなるかもしれない。その後、新しい准教授が来れば、私の代わりになってくれるはずだ。

外食はコロナ感染の危険が大きいので、私は毎日三食自炊していた。多いのはカレーライス。大量に作って、朝・昼・晩とカレーを食い続ける。二、三日経ったころがもつとも美味しいが、四日目以降になると少しずつ腐ってくる。同じようなことを、ハヤシライス、中華丼、ちゃんこ鍋などでローテーションする。変化をつけるためには、てんぷらや目玉焼きを添える。

マンションにいと、いつまた御手洗がやってくるかと怖くなった。そこで気晴らしのために海に行くことにした。ビジネスホテルに泊まれば、誰も訪ねてこない。

さっそく翌日の朝、車で二時間くらいのところにある漁港に行き、防波堤で大の字になってみた。青空が気持ちよかった。青いソメを買ってきたので、それを針につけて防波堤から放り投げた。もう秋だけど、キスくらい釣れるかもしれない。

しばらく魚の当たりを待っていたけれども何もかからなかった。私は釣り竿を防波堤に置いて横になり、空の中を動く雲を見ていた。

「お兄さん、気持ちよさそうだね」と八十歳くらいの老人が声をかけてきた。

「釣りは下手なので、こうしているだけで満足なんです。魚が釣れなくてもいいんです」「そうかい、それは欲のないことでけっこうだな。魚を釣りたい一心で、場所取りをしたり立ち入り禁止のエリアに侵入したりする輩が多いが、お兄さんはすがすがしい」と言っておじいさんは笑ってくれた。

好意をもってくれる人間と出会ったのは久しぶりのような気がする。それに、私のことを褒めてくれるし、お兄さんと言ってくれるとは、なんてやさしいのだろう。私はどうみても中年のよぼよぼしたおっさんだ。

結局キスは釣れず、クサフグが何尾か釣れただけだった。最後にはフグに釣り針を取られたので、竿をたたんだ。釣れたら釣れたで、その魚をどうするか悩むところだ。クーラーボ

ツクスも氷も持ってきていなかった。キスが釣れなくてよかった。

地方のビジネスホテルは五千円前後で泊まることができる。十分に消毒してあるだろうが、念のために部屋に入ったら窓を開けて、そこら中にアルコールを噴射した。夕食は外食はやめて、スーパーで海産物を中心に調達した。海が近くにあるスーパーの魚は新鮮で安い。スーパーからホテルに戻ると、フロントのお姉さんがにっこりと笑ってくれた。

「お帰りなさいませ。たくさん買っていらしたのですね」

なんとやさしい言い方なんだろう。御手洗と息詰まる会話ばかりしていたので、若い女性のやさしさに久しぶりに出会ったような気がした。部屋に入ると、スマホの着信音が鳴らないようにした。今夜は誰にも、コオロギにも邪魔をされずに、ゆっくりと眠ることができる。こんなことは久しぶりだ。

朝早く、朝食の前に砂浜に行ってみた。気持ちがいい。大きなヒラメが釣れて、そのまわりに人が集まっていた。大物を釣って喜ぶ釣り人と、それを称える人たち。大学ではめったに見られない光景だ。もう一泊しようかと思ったが、あしたは朝から講義がある。今日はカニでも食べて帰ることにしよう。

道の駅では、いくつもの店がカニを売っていた。前を通るだけで、「お兄さん、食べていきなよ」と声をかけてくれる。私は人気者になったような錯覚を覚えて嬉しくなった。そのうち一軒のおばあさんが私に向かって突進したかと思うと、腰を抱えて店の中に引きずり込んだ。「このカニ、五千円のものだけど三千円にまけてやる。おまけもつける」と言うので、私は買うことにした。足が取れたカニや小さなカニを三つもつけてくれた。それにしても、このおばあさんには根性がある。

買ったカニをテラスで食べてみると、さすがに自分のところの船で獲ってきたせいとか、新鮮でおいしかった。こんなに美味しいカニは、誰かといっしょに食べたいと思ったが、誰かが思い浮かばなかった。いっしょに食べたくなかったのは元嫁と御手洗だった。

帰宅する車の中で、やはり魚を釣って食べるのと虫を捕って食べるのは、同じことではないかと思った。野原さんが言ったことは正しく、自分はまちがっていたことを確信して嫌になった。

マンションに戻ってインターネットに接続すると、元嫁と教授からメールが入っていた。元嫁は私が返信しないことを怒っていたが、どう返信したらよいのかわからなかった。そのまま放置した。教授はする休みを続けるならクビにすると脅してきた。私は「仕事を減らしてくれるなら助教に降格してほしい」と返信した。

その日の晩、コロの鳴き声は以前にも増して大きく聞こえた。しかも、その声は洗面所や台所からではなく、目の前のテレビ台の下から聞こえることに気が付いた。コロは私がいないうちに、居間に移動したのだ。テレビ台からベランダまでは近い。コロは窓の外を見たにちがいない。そして、たまたま侵入した私の部屋を出て、生まれ育った大自然に帰りがつているのかもしれない。このままではメスに出会えないからだ。

そこで私はベランダに向かったガラス戸を少し開けてみた。このままテレビ台で鳴き続けられたら、さすがにうるさくて仕方ない。コロが生きたいように生きさせてやれば、外に戻りたいなら戻らせてやれば、私にとっても都合がよい。

夜にひと眠りしてから気が付くと、コロはベランダで鳴いていた。鳴き声は小さくなっていく。ベランダにあるエアコンの室外機の下は暖かく湿っており、これまでに何回か、コロギがやってきて棲みついたことがある。ベランダで鳴いていれば、その外にいるメスを誘って交尾できるのかもしれない。

翌朝、コロギの鳴き声はしなくなった。コロはベランダを超えて自然に帰っていったのだろうか。コロにとっては好ましい結末ではあるが、私はなんとなく寂しいような心情におちいった。日常的に接しているものがなくなると不安になるというのは、誰にでも起こる心理らしい。

午後になってから大学に行った。幸か不幸か教授は外出中だった。コーヒーを飲んでいると、研修員の雨宮真理がやってきた。教授のガールフレンドだ。

「お久しぶりですね。お体の具合はいかがですか」

「いや、まだ本調子とは言えないのだけれども、仕事がたまっているので出てきたんだ」

「教授がずいぶん心配していましたよ」

「助教も准教授も休学になったら、まずいだろうからね」

「とにかくがんばってください」

雨宮の性格は御手洗と比べればよいのだが、私が言うことはすべて教授に筒抜けになるだろうから、こちらはこちらで気を遣う。

それから大学院生や四年生にアドバイスを与えていると、御手洗がやってきた。私を見るなり「やっと出てきましたね」と言って笑った。

「教授はいないじゃないか」

「いろいろな役職をされているから忙しいのですよ。それに役に立たないスタッフばかりで、気苦労が大きいでしょう。ほんとうに気の毒だわ」

「留学生の論文作りで毎日徹夜していたんだ。俺だって十分働いている」

「そのあとさぼってばかりだから、せいぜいプラスマイナスゼロでしょう。威張れることではないわ」

「お前だって役立たずだ」

「私は大学院生でお給料をもらっているわけではないのよ。授業料を払っているのに、ろくな教育も受けずに一人でがんばっているのに、役に立たないとはどういうことよ。あなたたち無能な教官が国から給料をもらっているのにさぼってばかりだと、処分されるかもしれないわよ」

私はさらに言い返そうとしたが、これは御手洗がわざと挑発しているのではないかと気が付いた。御手洗の目的は私を追い落として、代わりにこの研究室の教官になることだ。挑発に乗ってはいけない。私は何も言わずに帰宅した。

部屋に戻ってテレビをつけたら、洗面所でコオロギが鳴いていた。一分間のリーンの回数 は五八回でコロと同じようなものだった。一方、ベランダからは音はしない。一度ベランダに出たコロは、また私の部屋に戻り、洗面所の奥に棲みついたのだ。ベランダへ向かうガラス戸は少し開けたままだった。

せっかく自然に戻ることができたのに、コロはどうしてまた私の部屋に帰って来たのか。そう言えば、コオロギの中には家屋に入る傾向が強いものがある、と検索サイトでも松浦先生の本でも書かれていた。部屋の中が暖かいからだろうか。天敵がいなくて安全だからだろうか。私の部屋の垢や私が与える果物の皮が美味しいからだろうか。いずれにせよ、これはコロが選んだ道である。コオロギを部屋に閉じ込めていじめている、という批判を受ける恐れはなくなった。

次の日曜日は、元嫁と息子に会う日だった。離婚のときに定められたことなので、会わないわけにはいかない。雨が降っていて憂鬱だったが、私は待合場所の喫茶店に行った。

決められた時間ぎりぎりに喫茶店に入ると、息子の直太郎はクリームソーダを飲んでいたら。元嫁は何も飲まずに私を睨んできた。マスクをしていない直太郎からコロナをうつされるのではないかと不安になった。

それでも笑顔をつくって、「久しぶり」と片手を上げながら言うと、元嫁は「何よ、返事もよこさないで」と言った。息子は私を見ないでクリームソーダを飲んでた。

「今日は雨だから、どこかほかのところに行くのは止めようか」

「いいわよ。ここでじっくり話し合いましょう」

私はコーヒーを二つ注文した。

「大学が忙しくて返信する余裕がなかったんだよ。うちのバワハラ教授のせいで、胃潰瘍になったことは知っているだろう。ほんとうにひどい目に遭ったんだ。最近になって、ようやく外出できるまで回復したんだ」

「それでは直太郎の養育費は値上げしてくれるわよね」

「給料が上がっていないのだから、それは無理というものだよ。養育費は離婚調停のときに決めたじゃないか。月に十万円払っているのだから、これ以上は無理だよ」

「直太郎にとっては、これからがとて大事な時期なのよ。塾に行かせて家庭教師もつけて成績を上げ、東京の私立高校に合格するの」

直太郎は少しびびくりしたような顔をしている。元嫁のプランあるいは妄想を聞かされていなかったようだ。

「そんなの無理だろう」と私が言うと、元嫁は顔を歪め、両手を大きく広げて「えー、自分の子供をバカにするわけ」と叫んだ。まわりの客たちが一斉に私たちを見た。直太郎は、信じられないという表情をして私を睨んだ。

「いや、合格するのが無理だと言うのではなく、東京の私立高校というのがむずかしいな。アパート代だけで十万円近くするはずだ。われわれの経済力では無理だと思う」

「われわれって何よ。私だって必死にパートで働いているのよ。一緒にしないでほしいわ。あなた、いつになったら教授になれるのよ。教授になれば給料も上がるでしょう」

教授になるどころか、助教に降格するかもしれないと思ったが、口が裂けても言えなかった。

「聞くところによると、あなたのマンションに若い女性がたびたびやって来るらしいわね」

若い女性なんか来るだろうかと思いいめぐらすと、御手洗のことだと気が付いた。

「えっ、来るとしたら大学院生くらいだが……」

「若い大学院生と恋愛しているの？ 許せないわね」

「いや、私の具合を心配して来てくれたんだ」

「やっぱり来たのね。それで部屋に引き込んでいやらしいことをしたってわけね」

「何もしていないよ。そんな魅力のある女ではない。教授のスパイのような女だ」

「教授のスパイってどういうこと？ あなた変なことしていないでしょうね」

「変なことって何だ」

「部屋で麻薬とか、売春とか、変な動物を飼っているとか」

「変な動物……」と言って私は考え込んでしまった。コオロギは変な動物だろうか。

「そんなこと、あるわけないじゃないか。それに君とは離婚したのだから、私の生活についてとやかく言われる筋合いはない」

直太郎が軽蔑の眼差しで私を見ている。

「私とは関係がなくても、直太郎とはあるでしょう。あなたには直太郎を養育する義務があるのよ」

反論する気をなくした私は「少し考えさせてくれ。今日は帰る」と言って喫茶店を出た。

雨はさらに強く道路のアスファルトを打ち付けていた。

雨が降ると、草原の虫はどうしているのだろうか。石の下や土管の中に逃げるのかもしれないが、そういう場所は天敵に狙われやすいかもしれない。だから、草や葉の陰に隠れて、天気が回復するのを待つと思われる。虫は変温動物だから、雨が降って気温が下がれば、活動は低下するだろう。人間だって、雨が降ると憂鬱になって部屋に閉じこもることがあるが、虫の場合、雨の影響はもっと大きいはずである。その点、コロは濡れることがないのだから幸せである。

その日の晩、大学や元嫁のことが気になって、よく眠れなかった。私は居間に布団を敷いて寝るのだが、これから寝ようと決めて就寝するのではなく、テレビを見ているうちに眠りたくなったら自然に眠ることにしている。そのために、テレビの音によって自然に目が覚めることもある。気分が高揚したり、悩み事があったりする場合にも、目を覚ますことがある。

このときは、浅い睡眠の中で、コロがテレビ台の下に移動したことに気が付いた。つけっぱなしのテレビの音がコロの鳴き声と重なって聴こえる。

次に気が付いたとき、コロはテレビの下から徐々に遠ざかっていた。移動中だから、コロの顔を見るチャンスだと思ったが、金縛りにあって体が動かなかった。やがてコロは冷蔵庫の下で鳴き始めた。こいつ、好き勝手に私の部屋を利用していると思ったが、不愉快ではなかった。

コオロギのことをもつと知りたかった私は、ペットショップに行ってみた。

ペットショップでは両生類や爬虫類のほかに、昆虫も売っている。

「いらっしやいませ」と若い女性店員が声をかけてきたので、

「コオロギはいますか?」と訊いてみた。

「はい、フタホシコオロギがいます」

「聞いたことがないコオロギですね」

「東南アジアやアフリカにいるコオロギで、日本では八重山諸島でも見つかっています。闘争心が強いので、外国では相撲をとらせて遊ぶそうです」

「コオロギが相撲を取るんですか？」

「どっちが勝つか賭けるんです」

「動物を使って金儲けですか。醜いし残酷ですね」

「闘牛や競馬も同じようなものではないですか。闘鶏やドジョウレースもあるでしょう。日本人だって、動物を使って金儲けをしていますよ」

私は言い負かされてしまったので、話題を変えた。

「一匹いくらですか？」

「えーと八〇匹で二千円ですから、一匹あたり二十五円です」

「安いですね」

「そうですね、アロワナやピラニアだと、すぐに二十四匹くらい食べますから、このくらいでも出費になりますよ」

「えっ、餌ですか？」

「生きた餌でないと食べないペットもいるんですよ」

「観賞用のコオロギはいないのですか？」

「スズムシは一匹三千円ですが……その辺にいるコオロギなら、原っぱで捕まえばいいので、うちでは売っていません」

私は少しがっかりしたが、店員の優しい対応に気持ちが安らいだ。

「いろいろありますが。よくわかりました。またコオロギのことを教えてください。それから、よかったらあなたのお名前を教えてください」

店員は「吉井麻衣と申します。またいつでも遊びに来てください」と言って微笑んでくれた。また優しい女性に出会うことができた。

十月に入り、大学では後期の講義が始まった。オンラインばかりだと学生の不満が高まるという理由で、講義室での対面講義をすることが求められた。私も大学に行かないわけにはいかなくなり、教授の分も含めて講義を始めたが、マスクをしなければならぬので、大きな声を出しにくかった。学生も聴きづらいうらさうと思っ

た。教授は研修生とどこかに旅行に行ったらしい。研究室には私と大学院生がいるだけだった。今日の教授会には、教授の代わりに私が出なければならぬらしい。

教授会のテーマは学部の評価をいかに上げるかという問題だった。主任教授が言うことには、昨年度の教員による発表論文数と大学院生が減っており、このままでは文科省から警告を受けるおそれがあるらしい。そんなことは教授の責任だろうと他人事のように聞いていたら、突然私は名指しされて、意見を求められた。

自分が論文を書いていないことは知れ渡っていた。それを否定することはできない。そこで私は窮余の策として、「教授が教育に熱心でなく、今日も遊びに行っています。助教はやる気を失って家に籠っています。どうしたらよいのか、私にはわかりません」と答えた。

主任教授は机を叩いて、「そんないい加減なことでは困る。このままだと、次の学部改革であなたたちの研究室をなくすことになる。何とかしなさい。とりあえず助教の家に行つて、大学に出てくるように説得してみなさい」と言った。

仕方がないので、私は助教の徳山が住むアパートを訪ねた。呼び鈴を鳴らしても、誰も出てこないが、電気のメーターは回っていた。

「俺だ。話がしたいから開けてくれ」と大きな声で呼びかけると、しばらくしてから徳山が顔を出した。

「びっくりしましたよ。また御手洗が来たのかと思いました。どうぞ入ってください」

徳山の部屋はゴミと本が入り混じって、足の踏み場もないほどだった。

お茶をだしてくれた徳山に「これならコオロギも喜びそうだな」とつぶやくと、徳山は「えっ」と怪訝そうな顔をした。

「御手洗はここにも来るのか？」

「そうなんですよ。教授の代わりだと言って、私を脅すんです」

「何と言って脅すんだ？」

「大学に退職届を出せと言うんです。そして業績の多い若手研究者を採用すれば、研究室の評価が上がるそうです」

「おまえを追い出して、代わりに御手洗が助教になろうという魂胆だろう。御手洗だって、それほど業績があるわけではないけどな」

「あまり業績が多いと、教授に嫌われるでしょう。だから我々は採用されたわけだし……」

御手洗は論文を二本書いているので十分ですよ」

「それで、これからどうするんだ。このまま休学ではまずいだろう」

「教授には、パワハラによって精神的に損傷を受けたと言つてあります。いざというときには訴えるつもりです」

「それはいいとしても、実習くらい出てきたらどうだ。俺は教授の講義も担当していて忙しいんだ。少しは助けてくれ」

「何か心を癒してくれるものはないかなあ。彼女はいないし……」

「ペットでも飼って見たらどうだ」

「犬や猫は怖いんです。寝ている間に噛みつかれるんじゃないかと想像しちゃって……。それに餌をやるのが面倒です」

「それなら虫を飼って見たらどうだ。いい音色で鳴いてくれるので癒されるぞ。ペットショップで安いコオロギを売っている。コオロギなら、この部屋で放し飼いにすれば、餌はやらなくていいだろう」

「わかりました。見に行ってみます」

マンションに帰ると、また子供たちが虫取りをしていた。

「これこれ、虫をいじめてはだめだぞ。食べるなんでもつてのほかだ」と私が言うと、お母さんがやってきて、「子供の遊びを妨害しないでください」と睨んできた。

「小さな虫をいじめるのは、どうかと思います。そんなことでは将来いじめっ子になりますよ」

「余計なお世話です。子供はいっぱい自然の中で遊ばないと、将来、誰かのような根暗の引きこもりになってしまいます。そう言えば、あなたは魚の先生ですよね。子供たちに魚捕りを教えてあげてくれませんか。魚を捕るのは得意でしょう」

そう言われて、私はギクツとした。確かに私は魚の研究者だが、川や湖で魚を捕ってばかりいたので、飽き飽きしていた。網を持って水の中に入ることは、もはや恐怖すら覚えていた。だから子供を連れて川に行くことはどうしても避けたかった。

「子供が川で死ぬ事故が多発しています。魚捕りなんか覚えたら、親が知らないうちに勝手に川に行つて溺れてしまうかもしれません。止めておきましょう」

「それでは虫取りのほうがいいではないですか。邪魔をしないでください」
お母さんに論破されて、私は引き下がった。どうやら自分は女性に弱いようだ。会話をしても、いつも言い負かされてしまう。悔しいので、部屋に入って寝た。コロの鳴き声優しく感じられた。

コロナ感染がまた増加しつつあったが、政治家や評論家だけでなく、学者の見解もあてにならない。人によって言うことが異なり、間違っているも誰も反省しない。シミュレーションと称して予測曲線が提唱されるが、そこに組み込まれているファクターも計算式も

示されず、予測が当たったのかはずれたのかもわからない。

コロナに感染したら死ぬかもしれない。若者でも後遺症によって、生涯苦しめられるかもしれない。それなのに、マスクもしないで街に出かけ、酒を飲んで騒ぐというのは、どういうことだろうか。

感染するのは嫌だけれども、自分は感染しないと考えるのかもしれない。東京でも感染するのは、一日にせいぜい千人に一人だ。確率は低いうえに、自分はこれまで感染していない。そもそも動物には臆病な個体と大胆な個体があり、その中間の個体もいる。大胆な個体は広く動き回り天敵も恐れないが、臆病な個体は危険に敏感で隠れ家に閉じこもっている。大胆な個体は多くの餌を獲得して速く成長し、多くのメスを獲得するけれども、天敵に襲われたり、病気に感染したり、他のオスと闘ったりして死にやすい。この原則は多くの動物で観察されている。コロは私の家に侵入した点で、大胆な個体だ。大胆な個体がいることによって、動物は新奇な生息地へ侵入することができ、他種との競争も有利になる。

人間にも大胆な個体と臆病な個体はおり、大胆な個体はコロナを恐れずに活動し、コロナのために活動を制限されることに強く反発する。だから、いくら家にいましょうと言っても、夜の街に出かけて大騒ぎするのだ。家に留まっていたは、友人とも付き合えないし、彼女もできない。

私は臆病なので、決して危険な場所には行かず、マスクも絶対にはずさないことにしている。しかし、大学に行けば大胆な学生もおり、完全にうつつされまいと努力しても、感染するかもしれない。

感染した人が出歩く場合、コロナウイルスに操作されて、危険な行動をしているのかもしれない。ウイルスにとっては、感染によって自分のコピーが広まることが望ましく、そのために取りついた人間の行動をより大胆で危険なように変えるのである。そんなバカな、と思われるかもしれないが、生態学では操作されて死滅する生物の具体例が山のように知られている。風邪を引いた人間が、マスクもせずに電車に乗ってくしゃみを連発するのも同じ理由によるだろう。こういう人は、ウイルスに有利な発言をするかもしれない。ウイルスは風邪と変わらない、ワクチンを打つことは副作用のために危険だ……など。

コロナに感染しても、死ぬのは中高年が圧倒的に多く、若者が死ぬことはほとんどない。一方で、この社会では、お金を持っているのも高い地位を占めているのも、ほとんどが中高年の男性だ。彼らが苦しむことを若者は無意識的に望んでいるのかもしれない。私は大学ではマスクを二重にして、決してはずさないことにした。

教授が旅行から帰ってきた。私に会うなり「生きとったのか」と言ったが、冗談というより本気のようにあり、私はひきつった。教授はウィルスに感染しているのかもしれない。

「講義や実習で大変だったのですよ。これからは教授も講義をしてくださいよ」

「わかった、わかった、おまえの講義では学生からクレームが来るからな。ところで、徳山はどうしている？ まだ退職届を出さないのか？」

「心を痛めているのですよ。無理に辞めさせるとパワハラで訴えられますよ」

「そうだな、おまえは助教に降格してくれとメールで書いてきたが、そんなことをして後でパワハラだと言われると、まずいことになる。どこか引き取ってくれるところを探して、いなくなってくれ」

「徳山はどうするのですか？」

「訴えられたり自殺されたりしたら迷惑だから、俺からはもう何も言わない。おまえが何とかしろ。徳山の仕事はおまえが担当しろ」

これ以上、教授と言いつても埒が明かれないと思った私は「はい」と言いつて実習に向かった。

帰宅したとき、すでに日が暮れており、寒くなっていた。もうすぐ十一月である。原っぱのほうではコオロギが鳴いていたが、どことなく弱く感じられ、鳴いている虫の数も少なくなっていた。鳴き声のペースも明らかに落ちていた。すでに交尾したオスは死んでしまったか、強く鳴くモチベーションを失ってしまったのだろう。

一方、コロは相変わらず元気で、洗面所と冷蔵庫の下を歩き来していた。鳴き声も以前と同じように張りがあり、最近ではリーンのりに艶があるように思われた。メスがやってこないことに対する失望やあきらめは感じられなかった。

メスなんかいないほうがオスは幸せなのかもしれない。私は元嫁や御手洗を思い浮かべつつ、そう思った。子孫をつくれないと、自分のもつ遺伝子を後世に残せない、と教科書には書かれているが、そうでもないだろう。人間もコオロギも有性生殖をするのだから、子に伝わる遺伝子は半分だけで、残りは配偶者の遺伝子である。もう、この時点で自分は消失しているのだ。

だから息子の直太郎は私ではない。孫となると、伝わる遺伝子は四分の一だ。どんどん少なくなっていく。一方、遺伝子の一部が共通している他人はいくらでもいる。自分が繁殖しなくても、自分のかけらはそこら中にいる。また、仮に自分の遺伝子が将来消失したとしても、そのとき自分はいないのだから、知ったことではない。それに、こんなことを考える出

来損ないの自分が、進化の到達点である現在、存在しているということは、どういうことなのだろうか。

翌日の午前中は講義がなかったので、ペットショップに行ってみた。吉井さんは私のことを覚えていて、にっこりと微笑んでくれた。

先日までいたコオロギもスズムシもいなくなっていた。

「虫がいなくなっていますね」

「もうすぐ寿命なので、売れないんです。それで、生きているうちにアロワナに食べさせたいんですよ。生きていないと食べないことがあるので……」

可愛い吉井さんがあまりにあっけらかんと言うので、「かわいそうに」という言葉を飲み込んだ。嫌われたくなかった。

「そうですか……。ところで、コオロギって、成虫になってからどのくらい生きるのでいいですか？」

「そうですね。種や個体によってちがいますが、一か月から二か月くらいだと思います。自然では、雨や霜にも弱いでしょうし、動きが鈍くなると天敵に狙われやすくなるでしょう。草が枯れて、隠れるところがなくなると、たちどころに鳥の餌になっちゃいますからね」

私は虫に生まれなくてよかったと思った。確かに草の勢いはなくなり、枯れかけているものが多くなっていた。冬が近づくにつれて、隠れ場所だけでなく、コオロギの食べ物も少なくなるだろう。食べ物なくなるから、コオロギは卵のかたちで冬を越し、春を過ぎてから幼虫になるのだと考えられる。

コロは九月の終わりにやってきたので、そのときからすでに一か月以上経っている。コロが成虫になってから私の部屋に来るまでの期間はわからないが、そろそろ寿命が来ているかもしれない。私はスーパーで柿を買って、コロに与えることにした。

一か月に二回、元嫁と息子に会う約束をしており、十月の二回目がやってきた。この日は快晴だったので、向こうの希望にしたがって動物園で待ち合わせた。私はマスクを二重にした。

「直太郎は動物が好きなのよ。あなたも憶えているでしょう」

「そうだったかな。別れてからずいぶん経つから、忘れてしまった」と私が言うと、直太郎は「ちえっ」と舌打ちした。直太郎もマスクをしていたが、その飛沫が飛んでくるのではないかと思って、顔をそむけた。それを見た直太郎は顔を歪めた。

私は気が付かれたと思って、「直太郎はどの動物が好きなのかな。まさか魚ではないだろうな」と言って、動物に話を戻した。

それに対して直太郎は黙っていたが、元嫁が「虫が好きなんですって。私も初めて聞いたのよ」と答えた。

「虫といってもいろいろあるだろう。カブトムシやクワガタかな。まさかゴキブリではないだろう」と言うと、直太郎はバカにされたと思ったのか、ぺっと唾を吐いた。私は思わず後ずさりした。

「それが良い声で鳴くスズムシやコオロギが好きなんですって。優雅な感じがいいでしょう。直太郎も大人になってきたのよ」

「そうかな。なんだか不思議な感じがするな」

私がそう言うと、直太郎は私を睨んできた。

直太郎がコオロギを好きだと聞いて、私はなんだかぞっとした。私と直太郎に共通した遺伝子がコオロギの音色を好むのだろうか。それにしても、直太郎にスズムシやコオロギは似合わない。直太郎ならアメリカザリガニかシマイシビルだろうと思ったが、もちろん口には出さなかった。

「だから直太郎のことを、もっと支援してあげてよ。たった一人の息子でしょう。あなたの遺伝子を受け継いでいるのよ」

「おまえの遺伝子も受け継いでいるだろう。直太郎は私ではない」

それから、動物園の中にある昆虫館にいったが、スズムシやコオロギの展示はもう終わりになっていた。空っぽの昆虫館にがっかりした直太郎は「もう帰る」と言って、結局私には何も言わずに走り去っていった。元嫁は最後に私を睨んで「ちゃんと考えておいてね」と言い残して帰っていった。人を睨むという点において、直太郎と元嫁は似ている。

卒業研究の面倒を見なければならなかった。五人の四年生のうち女子学生が二名おり、彼女たちの指導は教授が行うことになった。残った三名の男子学生は私が見ることになっていたが、留学生に続いて卒業論文まで私が書くのは嫌だった。コロナを移されるのも怖かった。そこで過去の卒業論文をいくつか選んで、それに新しい観察や実験結果を付け加えて完成させることにした。その相談を学生としていたら、教授がやってきた。

「大学院生はもちろん、学生が卒業論文を完成させるためには、研究費が必要だ。これまで私が取ってきた研究費で賄ってきたが、足らなくなってきた。君や徳山が研究費を獲得できないからだ。君が最後に科学研究費を取得したのは八年前だろう。どうして研究費を取っ

てこないんだ！」

「文科省の科学研究費は最近の業績がないと通らないのですよ。私には無理です」

しばらく考えた教授は、「それでは君の給料から支出したまえ。とりあえず五十万だ。わかったな」

そう言って、教授は私の反論も聞かずに帰っていった。学生たちはくすくすと笑っていた。それにしても自分の給料から研究室に金を拠出しろとは、いくらなんでも、聞いたことがない。それに、教授のほうがかはるかに多い給料をもらっているのだから、教授がまず身を切るべきだろう。これはパワハラだから、何としても防ぐ方法を考えなければならない。

その日の夜、私は気が滅入ってはやく寝たせいも、草原でコロと遊ぶ夢を見た。私はコロギほどの大きさになって、四つん這いになって草陰を歩いていた。コロは私の横で楽しそうだった。ほかにも何匹ものコロギやバッタが日の光を浴びてくつろいでいた。

しかし、私たちの幸せは一瞬のち恐怖に変わった。空から飛び込んできたモズがバッタの一匹をくわえて飛び去ったのである。私たちは一斉に草の下に隠れ、モズに見つからないようにした。モズは捕まえたバッタやコロギを木の枝に刺してから、また次の獲物を探していた。

私もモズに見えない石の下に身を寄せ、その傍らにコロがいた。

「恐ろしいね」と私が言うと、コロも「リーン」と鳴いた。

次の瞬間、私は顔の上に何かが這うような感じがして目を覚ました。何か虫が這って行ったような感触だった。今、顔の上にはいたのはコロだろうか。コロとは草原の石の下にいたはずではなかったか。そうだ、コロかどうか確かめてみよう。そう思った私であったが、実際には体は動かず、そのまま寝てしまった。数時間後に起きてから、何が真実であったのか知りたかったか、結局わからなかった。

十一月になった。色づいた木々の葉は次々に落ちていった。草原は褐色に染まり、徐々に小さくなっていく。夜になって耳を傾けても、虫の声はわずかに弱々しく聴こえるだけだった。そう言えば、今年はコロのほかにはペランダに侵入するコロギはいなかった。去年も一昨年もコロギは来たのに、どうしたことだろうか。考えられる理由はコロだった。ほかのコオロギがペランダに近づくと、自分のなわばりが侵略されると思ったコロが、激しい威嚇音を発して追い払ったにちがいない。

しばらく部屋でテレビを見ていたが、情報番組ばかりやっており、コメンテーターがうるさい。多額の出演料をもらえる情報番組で、なわばり争いをしているようだ。有名になって

選挙に出たいと顔に書いてある者もいた。訊かれたらすぐにテレビ局が喜ぶ、気の利いたコメントを発しなればならないというのは、気の毒なものである。わからないことでもわからないと言うことは許されない。じっくり考える時間は与えられないのだ。

気が付くと玄関の外が騒がしい。何かと思ってドアを開けると、福田さんの犬と下平さんの猫が争っている。あまりの剣幕に福田さんも下平さんも、どうしたらよいかわからず、うろたえていた。犬の方が大きいから猫を圧倒するのかもしれないが、実際には猫の気迫が勝っていた。毛を逆立てて体を丸め、ワオと唸ったのち、前足で犬の頭を何度も打ち付けると、犬はキャンと鳴いて逃げていった。このネコは大胆で、イヌは臆病なんだと思った。小さくても弱くても、気迫で圧倒するのは有効な戦法だと気が付いた。

翌日、講義はないけれども、朝早くに研究室に出かけ、書きかけていたまま放っておいた論文を取り出してみた。これを学会誌に投稿しても却下されるかもしれないと思っていたのだけれども、手を入れれば何とかなるかもしれない。却下されたとしても、どこが劣っているのかを知ることが出来るだろう。それに、私の研究者としての評価は最低なのだから、却下されても何も変わらない。そう思うと、なんだか気持ちが悪くなってきた。

論文を前に、ああでもない、こうでもないと言っているうちに、良いことを思いついた。私は研究用に高性能の音声録音機を持っていた。観察で忙しいときに、いちいちノートに記録していると、次の観察がおろそかになる。そこでノートに記録することを現場で録音し、のちに再生して記録するのである。その録音機を研究室から持ち出して、コロの鳴き声を録音してみようと思った。そうすることによって、コロが死んでも、いつでもその歌声を聴くことができる。

コロはしょっちゅう鳴いているので、簡単に録音できた。次に私は大きな虫かごを購入して、その中に録音機を入れ、コロの鳴き声を再生しながら、原っぱの真ん中に置いてみた。ほかのコオロギがどのような反応を示すのか、見てみたかったからである。

もう鳴いているコオロギはいなかった。私はときどき充電しながら、周囲を観察し続けた。しかし、夜間に草の下にいるコオロギを観察することはむずかしかった。そこで録音機を入れた虫かごの入り口を狭めたうえで、一晩中虫かごを置いてみることにした。

やはり何も入らないかと思った二晩目に、私は小さなコオロギが虫かごに入っていることに気が付いた。そのコオロギについて図鑑を片手にしらべると、オカメコオロギのメスだった。

私は嬉しくなって、その虫かごの入り口を閉じたうえで、部屋に持ち帰り、コロが鳴く近くに置いてみた。とりあえず、コロの反応を見てみようと思ったからである。入り口を閉じたままにしたのは、コロがこのメスを襲ったり食べたりしないように配慮したためである。コロとこのメスが同じ種であるという確証はなかった。

虫かごの中のメスは鳴かなかった。文献通りである。しばらくしてコロが鳴きだしたが、音色がいつもとちがうように感じられた。そこでリーンの回数を数えてみると、一分間に四十前後に減っていた。やがて、コロは声のトーンを落として、コローリ、コローリと甘い声で鳴きだした。この鳴き声はオスがメスを誘うものらしい。

そこで私は虫かごの入り口を開放した。メスはすぐに虫かごを出て、近くにおいてあった野菜の下にもぐりこんだ。コロは黙っていた。そのままの状態にしておくうちに、私は眠ってしまった。起きたとき、私は詰めが甘いと思って情けなくなった。もつとちゃんと観察すれば、コロとメスの交尾を確認することができたかもしれない。やはり自分は出来の悪い研究者だ。

起きてから三時間ほど耳を立てていたが、何の音も聴こえなかった。コオロギの姿も見えなかった。

嫌になった私は出勤し、論文を直し始めた。そこへ御手洗がやってきて「ひきこもりは終わったのですか。助教に降格してもらった話はどうなったのですか？」と言ってきた。

「論文を書いているんだ。君には残念だろうが、ここの教官は辞めないよ。辞めるときは、ほかの研究室に移るときだ」と言い返してやった。

「ふーん、大丈夫ですか。季節の変わり目でおかしくなったのではないでしょうね」

「そういう言い方は止めたほうがいい。学会での君の評判もそれほど芳しいものではないからね」

「私を脅しているのですか。私の悪口を言いふらすようなことがあったら、パワハラで訴えますよ」

私は御手洗が録音していることを念頭に、言葉を選んで忠告した。

「いや、私は君の成功を願っているのだよ。学会には保守的な先生も多いから、目立つ学生は生意気だとつぶしにかかるかもしれない。そういうことがないように、注意したほうがよいとアドバイスしただけだ」

御手洗は疑い深い目つきをしたまま、研究室の外に出ていった。

虫かごから出したメスのコオロギがその後どこで何をしているのか、まったくわからな

なくなった。なにしろ鳴かないから、隠れているかぎり見つからない。もちろん、そこら中をひっくりかえして見つけ出すような真似はしたくない。

一方、コロは再び力強く鳴くようになった。コロとメスが同じ種で交尾して、メスが冷蔵庫の下あたりに卵を産んだことを期待しているのだが、その結果がわかるのは来年になってからである。卵がほかの虫に食べられてしまうこともあるかもしれない。野外とちがう環境なので、卵が腐ってしまうことも考えられる。土の中ではなく、冷蔵庫の下で卵が孵化し、コロの子供たちが生まれるのか否かは定かではなかった。

それでも私は満足だった。たった一匹で鳴き続けていたコロが、メスを見つけ求愛の歌を発したのである。メスに食い殺されることもなく、コロは鳴き続けている。コロも嬉しかったに違いない。

ますます寒くなってきた。私は車のタイヤをスタッドレスに交換し雪に備えた。冬眠前のクマが近くの柿の木に登っていたらしい。イノシシが町に出て、暴れる時期でもある。私が住む田舎の町では、いっどこから獣が襲ってくるかわからない。コオロギほどではないけれども、周囲には十分注意しよう。夏から秋にかけて、あれほど盛んに鳴き続けていた虫はもうすっかりいなくなっていた。

研究室では学生たちが暖房の利いた部屋に集まるようになった。窓を開けて換気するように言っても、言うことを聞かない。私は学生との距離をとりながら論文を直していた。質問があったら直接訊きに來ないで、メールを送るように指示を出しておいた。

その翌日、徳山が半年ぶりにやってきた。学生たちはクマでもやってきたかのように、徳山から距離をとって見て見ぬふりをした。

「やっときたな」と私が声をかけると

「家に閉じこもっても何も解決しないことに気が付きました」と徳山は答えた。

「それでは休学を取り消して実習も担当してくれるんだな」

「はい、そのつもりです」

「私も覚悟ができています。いっしょにがんばろう」

教授は今日も研修員とどこかに出かけている。どこに行ったのか御手洗に訊くと、まだ紅葉がきれいな京都を旅行しているらしい。京都ではうちの県よりコロナが広まっている。こんな時に旅行して感染したら、そのウイルスをうつされてしまうかもしれない。迷惑な話だ。それにしてもコロはまだ生きている。原っぱで鳴くコオロギはもういないのに、少し弱くなったものの、コロはまだ鳴いている。私の部屋にやってきたのが九月の終わりだったから、

もう一か月半以上生きていくことになる。天敵がいないうえに、外に比べれば暖かい私の部屋は棲みやすく、長生きできるのかもしれない。

私は元嫁と直太郎を喫茶店に呼んで、息子への支援について、改善策を示した。これまでの養育費に二万円を加えることにするが、それ以上は無理であることを説明した。何といつても、マンションのローンが残っており、その支払いとこれまで通りの養育費を考慮すると、二万円が限度だった。

元嫁はもっと出せないのかと不満そうだったが、息子は二万円と訊いて嬉しそうだった。養育費は息子ではなく、元嫁のために使われるかもしれないのに呑気なものだ。この程度の知能では、将来ろくな人間にならないだろう。

「おまえは将来何になりたいのだ？」と私が訊くと、息子は「公務員」と答えた。

公務員になりたい理由は、私のように何もしなくても給料がもらえるからだそうだ。しかし、大学も含めて公務員の世界はパワハラで満ち溢れている。それに、こいつは耐えられるだろうか。人間の部屋に入り込んでまで長生きしようとするコロの翅の垢でも飲むべきだ。それに、私のような無能公務員やパワハラ教授が生きられる時代は、じきになくなるだろう。機嫌のよい息子を見るのは久しぶりだったので、「来年の夏になったらコロオロギでも捕りにいこう」と言ったら、直太郎は素直に首を縦に振った。

養育費を増やす以上、研究室に五十万円抛出するのは無理だった。

私は旅行から帰ってきた教授の部屋のドアをノックした。

「金、持ってきたか」

「徳山が出勤しました」

「あの役立たずが。退職届を出すんじゃないのか」

「これからやり直したいと言っています」

「それで金はどうした」

「研究室の運営にお金が必要なことはわかりますが、どうして私の給料から出さなくてはならないのですか？」

「おまえが研究費を取ってこないからだ。身を切って研究室のために尽くすんだ」

「私はあなたの指示にしたがって、留学生の論文を作成したではないですか。あなたの代わりに講義もしています。役に立っていないとは思われませんか」

「口ごたえするならクビにするぞ」

「教授も論文を書いていないし、研究費を獲得していないではないですか。私だけの責任で

はありません」

「これから三つの選択肢を選ばせてやる。一つ、一か月以内に百万円用意しろ、二つ目、今すぐ辞表を書け、三つ目、私を辞めさせてみる」

私はしばらく沈黙した。二分ほど黙っていた。教授は勝ち誇ったような顔をして笑っていた。

「今日の会話はすべて録音しました。これを教授会に提出します。だから私の答えは三つ目です」

そう言うと、顔をひきつらせて真っ赤にした教授を残して、私は部屋を出た。

なんだか気分が高揚した。とりあえず、録音したものをコピーして、研究室と自宅に隠しておいた。それからペットショップに出かけた。吉井さんがいたので声をかけた。

「私の家にいるコオロギはまだ生きてます。もう一か月半も私の部屋にいます」

「あら、すごいですね。きつと居心地がいいのでしょうかね」

「ときどき果物の皮や芯をあげています」

「とてもやさしいのね。すばらしいわ」

「吉井さんはコオロギの鳴き声をどう思いますか。うるさいですか」

「そんなことはないですよ。スズムシの鳴き声だけでなく、コオロギの鳴き声も好きですよ。心が癒されます」

「それはよかった。私はコオロギに勇気をもらいました。努力と知恵で困難な状況を打破するつもりです」

「はあ、よくわかりませんが、よかったですね。がんばってください」

「吉井さんはいつも明るく、優しい言葉をかけてくださるんですね。私は吉井さんのことが好きになりました。もしよかったらお友達になっていただけませんか？」

吉井さんは少しびびったりしたのち、「私はもうすぐ結婚するんです。お付き合いはできません」と申し訳なさそうな顔をした。

「そうですか。おめでとうございます。いい年をしてごめんなさい。でも、ここに来たときに、これまでと同じようにいろいろ教えてください。それだけで私は嬉しいですよ」

私は精いっぱい笑顔をつくった。それにしても、こんなに大胆なことを言った自分が誇らしくなった。当たって砕けても、失うものは何もない。口笛を吹きながらペットショップの入ったショッピングモールを出ると、大粒の雪が舞っていた。

それから数日して、コロは鳴かなくなった。一時的に鳴くのを止めただけかと思ったが、

次の日も、その次の日も鳴かなかった。気温が低くなると鳴くことができなくなる、と本に書いてあったので、エアコンをつけてかなり暖かくしてみたが、やはり鳴かなかった。さすがのコロも、とうとう息絶えたと思わざるをえなかった。おそらくコロの屍はメスとともに冷蔵庫の下にあるのだろう。私はそれを放っておくことにした。コロの精子を受け取ったメスは、すでに卵を産んだはずである。その卵が越冬し、来年コロたちの子供が生まれたら、親の屍とともに過ごすことになる。それは、おそらくコロとメスにとって望んだ結末であるはずだ。私は、コロたちの子供か、それがかなわない場合には、コロとメスの屍をいつか見つけたときに、コロの大胆で精力的な生き方を思い出すだろう。

了

本作品の背景、登場人物、登場動物は実在するものではありません。

以下の文献を引用したり参考したりさせて頂きました。

公刊図書：

正木進三（1974）昆虫の生活史と進化―コオロギはなぜ秋に鳴くか。中公新書。

松浦一郎（1989）鳴く虫の博物誌。文一総合出版。

米田一彦（2017）熊が人を襲うとき。つり人社。

ウェブサイト：

日本の昆虫・カエルの鳴き声―コオロギの鳴き声（兵庫県立人と自然の博物館）

<https://www.hitohaku.jp/material/i-material/sound/koorogi>

俳句季語一覧ナビ―季語/蟋蟀（こおろぎ）を使った俳句 [https://www.haiku-kiyo-](https://www.haiku-kiyo-ichiran.net/koorogi/)

[https://www.haiku-kiyo-](https://www.haiku-kiyo-ichiran.net/koorogi/)